

# 私の歩んできた道

ソウルから日本へ、そして都市を紡ぐ未来へ

## ○ソウル特別市・カンドン（江東）区で育って

私は韓国・ソウル特別市出身です。ソウルは東京23区とほぼ同じ人口規模の大都市であり、韓国の政治・経済・文化の中心地でもあります。その中でも私の故郷であるカンドン区は、ハン川（漢江）の南東側に位置しています。住宅地として知られ、いわゆる「ベッドタウン」です。マンションや団地が多く、都市の喧騒と郊外の静けさが混ざり合う場所です。育ちました。

私の父も日本への留学経験があり、私が幼い頃にはアニメの輸入に関わる仕事をしていました。家には日本の漫画やアニメ作品が多くありました。特に、宮崎駿監督の『未来少年コナン』や漫画家岸本齊史の『NARUTO -ナルト-』を見ながら、日本文化に触れて育ちました。このように異文化を自然に受け入れる環境が家庭にあり、それが後の進路選択にも大きな影響を与えたと思っています。

## ○日本留学のきっかけ

高校時代の私は、空間のあり方やデータに興味を

抱きながらも、地理の成績が良かったことから地理学科に進学したいと思っていました。高校3年の進路相談の時、地理教科の姜先生に「韓国では地理学はあまり人気のある学科ではない。もし本格的に学びたいなら海外、特に日本や欧米で学ぶのが良い」とアドバイスを受けました。その一言をきっかけに、海外で学ぶことを真剣に考えるようになりました。

## ○韓国の教育環境と日本での発見

韓国の教育環境は、大学進学競争が非常に激しいことが特徴です。特にカンナム（江南）区は教育熱が高く、有名塾や進学校が集中しています。私の地元であるカンドン区もカンナム区に近く、その影響を強く受けており、幼い頃から「良い学校に入ること」が当たり前の目標となっていました。

私が通っていた高校は全国区の進学校で、朝8時に登校し、夕方5時まで授業を受けた後、自律学習を夜10時まで行う生活が日常でした。授業が終わっても塾やオンライン講義で深夜まで勉強し、週末も休みなく塾へ通いました。高校3年間、毎月10万円以上の学校外教育費がかかり、家族の負担を考える

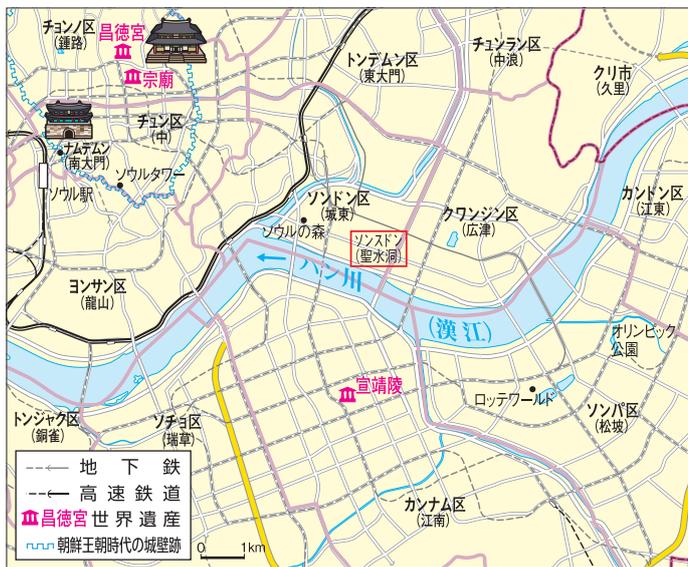


公益財団法人  
守屋留學生交流協会  
第44回奨學生

オ ソン ホ  
**吳 成 浩**

— 略歴 —

- 1997年 韓国 ソウル特別市生まれ
- 2021年 立教大学文学部史学科超域文化学専修 入学
- 2025年 立教大学大学院文学研究科超域文化学専攻 修士課程入学



ソウル特別市東部

と「良い大学に行かないといけない」と、自分むち打ち努力しました。

そのような環境で育った私には、日本の大学の友達から聞く高校生活の話は大きな驚きでした。多く



写真2 ソンスドンの倉庫を改装したカフェ (写真: アフロ)



写真1 ソンスドンのカフェ通りを行き交う人々 (写真: konatu/PIXTA)

の学生が進学準備を始めるのは高校3年生からで、部活動や文化祭などにも熱心に取り組んでいる姿を聞いて、「学び」と「生活」が自然に両立していることに感動しました。日本では勉強だけでなく、人間としての成長や社会との関わりを大切にすることが根付いており、そのバランスの良さに魅力を感じました。

### ◎ 立教大学での学びと都市への関心

コロナ禍の2021年、立教大学文学部史学科超域文化学専修に進学し、4年間、地理学や文化人類学を中心に学びました。特に、都市の形成過程と人々の文化を歴史的・人類学的視点から考察する授業は印象的で、次第に私の関心は「都市空間と人間の関係」へと移っていききました。

大学に通いながら東京の街から感じたのは、都市が常に変化し続けながらも、人々の思い出や過去が共存しているということです。例えば、下町では再開発によって新しい建物や商業施設が生まれる一方で、古い喫茶店や商店街が人々の記憶をとどめるように存在しています。その共存のあり方に、東京の成熟を感じました。

### ◎ 大学院での研究テーマ

こうした経験をもとに、大学院では都市地理学と文化人類学を融合させた研究を行っています。テーマは「カフェ空間の公共性と都市再生への寄与」であり、東京とソウルの再開発地域を比較対象としています。

例えば、東京の清澄白河や下北沢、ソウルのソンスドン（聖水洞）などの地域では、カフェが単なる

商業施設ではなく、人々が集い、地域の文化やアイデンティティを再構築する場として機能していることに注目しています。私はフィールドワークを通して、これらの空間がどのように都市の魅力形成に寄与しているかを分析しています。

研究を進める中で実感したのは、都市は建物や交通インフラだけでなく、「人と人との関係性」で成り立っているということです。地理学が示すのは「空間の配置」だけではなく、文化人類学が捉える「そこに生きる人々の時間の積み重ね」でもあります。私は、地理学を通して人々の暮らしや感情がどのように空間に表れるのかを読み解き、より豊かな都市のあり方を考えたいと思っています。

### ◎ 将来への展望

今後は、修士課程で得た知見をさらに深め、日本のデベロッパーや不動産企業への就職を希望しています。将来的には、都市開発や地域計画の実務にも携わり、都市が持つ文化的・社会的価値を尊重した都市再生を提案する仕事に就きたいと考えています。韓国と日本、二つの都市文化の間に立ち、両国の経験と知見を結び付け、人々の生活に寄り添うまちづくりに貢献することが私の目標です。

日本に来てからもう4年がたちました。振り返れば、言語や文化の違いに戸惑うこともありましたが、それ以上に多くの学びと出会いに恵まれました。今では東京は私の「第二の故郷」と呼べるほど、心に深く根付いた場所になっています。これからも感謝の気持ちを忘れずに、地理学というレンズを通して、人と都市の関係を見つめ続けていきたいと思っています。